

「着任の抱負」

国際文化研究科

菅谷奈津恵

(2011年10月発行『国際文化研究科公報』24号掲載原稿をもとに加筆修正)

この4月から国際文化研究科の一員となりました。東北大へは昨年9月に赴任し、学部留学生の日本語教育を担当しています。大学院の授業を担当するのは初めての経験であり、自分自身の学生時代を振り返りながら手探りで取り組んでいます。

学部生時代の専門は日本文学でした。古事記から井原西鶴、北杜夫まで学んだはずなのですが、その中身は残念ながらすっかり忘れてしています。当時の先生方には申し訳ありませんが、記憶に残っているのは、薄暗い研究室で分厚い資料をめくりながら演習の準備をしていた情景ぐらいです。

大学院では日本語教育を専攻しました。その後はずっと第二言語としての日本語の習得研究に取り組んでいます。ここで私が得たのは、研究の基礎と頼りになる仲間、そして慢性の肩こりでした。

修士の1年目から、同級生4人で地域に住む外国の方を対象に日本語教室を開きました。その際の授業の様子や作文、インタビューをデータとし、4人がそれぞれのテーマで修士論文としてまとめました。「文字起こし」をしたのは初めてでしたが、想像以上に骨の折れる作業でした。日本語を母語としない方の発話には、単語や助詞、活用など、規範的でない使い方も多く、何度も聞きなおす必要がありました。実は、このとき生まれて初めて肩こりになりました。「肩がこるとはこういうことか」と最初は感動しましたが、すぐに感動どころではなくなりました。4人で分担していても、毎週何時間も文字起こしに費やされ、それが2年近く続きました。フルマラソンを何度も走らされている気分でした。

面倒な作業ではありましたが、多くの発見もありました。スクリプトを確認していると、耳で聞いていただけではわからなかった特徴も見えてきます。同じような誤用でも、出現する言語環境が少しずつ変化していることがわかり、縦断研究のおもしろさを感じました。見よう見まねで始めた調査でしたから、無駄や失敗も多くありました。自分がひどい授業をしてしまったときは、録音を聞き直すのが苦痛でもありました。最後までやりとげることができたのは友人たちのおかげだと思います。

今また新たなプロジェクトを始めるとしたら、しっかり計画を練り、よりシステムティックにデータ収集ができるであろうと思います。国際文化研究科の学生さんと、これからのような研究を進めることができるのか、楽しみにしています。